

精神分析と自己物語論の間 ——竹中均『精神分析と社会学』を読む——

東京学芸大学 浅野智彦

0、はじめに

自己の成り立ちについて社会的に考えようとするときに、精神分析、特にラカン派のそれは豊かな洞察と示唆を与えてくれる。初期フロイトの『科学的心理学草稿』読解を導きの糸とする本書もまたそのような洞察と示唆に満ちている。なかでもここで注目したいのが、

- ・自己言及と主体の分裂
- ・現実界と現実

という二つの論点だ。以下この論点に照準し、自己物語論を補助線としながら本書を読み解いてみたいと思う。

1、自己言及と主体の分裂

教科書的なフロイト理解を書き換える著者の手並みは一貫してみごとなものであるが、なかでも快感原則と現実原則とを再解釈してみせる3章の議論は実に鮮やかである。この再解釈のために著者はフロイトのごく初期の草稿『科学的心理学草稿』にまでさかのぼり、その議論に検討を加えている。そこから筆者が取り出したのは、一次過程から二次過程への移行に伴う次のような二つの転換であった。

- (1) 部分から全体への転換
- (2) 実質的対立項から論理的対立項への転換

著者は、まず(1)を検討しそこから(2)を理解するという道筋をとっている。(1)の要諦は、個々の部分とは異なる全体性が外に追放されると同時に維持されること、すなわち語の精神分析的な意味において抑圧されること、これである。これによって意識と無意識とが相互に支え合う形で成立し、(2)の転換が成し遂げられると著者は言う。

自己物語論の観点から見てさらに興味深いのは、この(2)の転換が言語にもたらす効果である。著者はその効果が最も集約的に現れてくる場面として自己言及的な命題をあげる。引用してみよう。

「問題なのは、『私はここにいない』という言明が、それ自体で自足しているのではなく、常に、『私はここにいない』と私は言う」という構造を持っているという点である。」(100)

このような「ない」は「ここにリンゴはない」という場合の「ない」とは違って、命題の中にある捻じれを生み出してしまふ*。このような捻じれを解消するためにラカンが提案したのが『言語内容の主体』(私1)と『言語行為の主体』(私2)という『主体の分裂』というアイデアであったと著者は言う(103)。

しかし話はここで終わらない。なぜなら分裂した二つの私はそれでも同じ私でなければならないからだ。そうでなければそれはそもそも「私」という同一性自体を失うことになるだろう。したがってこの分裂は同時に何らかの統合をも伴うものであるはずだ。この統合の形式が自己物語であるとひとまずは言うておくことができる。すなわち、かつての私がどのようにして今の私となったのかを語る物語(自己物語)は、語られる私(過去の私、ラカンの言う私1)と語る私(現在の私、私2)との差異性と同一性とをともに構成するものである。

この発想をもう一度上の(1)に戻して考えてみると次のように言えるのではないか。部分とは物語の個々のエピソードであり、全体とはそれらを統合する自己物語である、と。そうだとすると、(1)の転換とは、個々のエピソードとは別の水準に、それらエピソードをとりまとめ構造化する<何か>を「追放すると同時に維持すること」、これを意味することになるだろう。この「抑圧」が達成されたおかげで自己は、個々の多様で具体的な諸関係に左右されない一定の同一性を確保することができる。

ところでこのような「抑圧」こそ、第四章で著者が肯定的に評価している大澤真幸によって衰弱しつつあると診断されている当のものなのである(大澤[2004])。大澤は、「マルチストーリー・マルチエンディング」というタイトルの論文において「われわれの生の断片を繋げる『糊代』のようなもの」がますます小さくなっていくと論じている。ここで「糊代」と呼ばれているものが、「抑圧」において追放されつつ維持されている<何か>なのである。結果、その<何か>は個々のエピソードの系列のうちにそれ自体一つのエピソードとして姿を現わすことになるだろう。具体的に言えば、複数の人格が統合されないままに一つの身体上に共存するかのごとき様相、いわば乖離(的)と呼ばれるであろう状態を呈することになる。実際近年の若者の乖離傾向は、経験的な研究においてもしばしば指摘されていることである。

とすると、フロイト＝ラカンの議論において定数として扱われている「抑圧」は、社会的な変数として読み替える必要があるようだ。その際に自己物語というコンセプトを経由することは有望なオプションであるように思われるのである。

2、現実界と現実

精神分析と自己物語論との相性のよさともいえるべきものは、構成主義的な認識論を参

*著者は、言語は「実質的対立」であると論じているが、この点はもう少し慎重に考えてみる余地があるように思われる。むしろ言語は「論理的対立」であるが、それとしては完結し得ないからパラドクスが生じるのだと考えるほうが著者の論理からみても一貫性があるだろう。したがって「私はここにはいない」という文章のもつねじれは、その「ない」が実質的対立だから生じたというよりは、論理的対立のほころびであるから生じたと理解すべきである。

照点にとることによっても示すことができる。すなわち、構成主義が現実を（言説に媒介された相互行為において）構成されるものと見なすのに対して、そのような現実とは異なった水準に別の現実を想定する点で精神分析と自己物語論の構えにはある共通性が見られるのである。精神分析の場合この別の現実とは言うまでもなく「現実界」のことだ。著者は言う。

「ラカンの『現実界』という概念は、そのネーミングのあっけなさとは裏腹に、社会的な現実概念に対する挑発的な批判、しかしある意味で内在的な批判として位置づけることができる。・・・(中略)・・・

最近の社会学理論が、現実とは二次的に構成されたということに強調点を置く姿勢を強めていることを考えれば、精神分析と社会学を、個人か社会かという違いを越えて、ラディカルな現実構成主義という姿勢によって架橋するのは必ずしも無理ではないように思われるのである。」(15)

他方、自己物語論の場合、現実界に対応するのは、物語の中核にありながら決して語られることのできない何か、いわば「語り得ないもの」である（浅野[2001]）。

ところで著者は第五章で榎村愛子の議論を検討した上で、

「しかし、この言葉が示唆している『現実界』（ラカンの用語）の問題こそ、ありうべき『ラカン派の社会学』の根幹をなすはずである。ところが、榎村の本書においては、この問題は示唆されるにとどまり、十分な展開がされていないようにも思われる。」(176)

と述べているのであるが、このコメントは本書に対しても向けられる可能性がある。といってもそれによって本書を批判しようというわけではない。その定義上、現実界について「示唆」とどまらない「十分な展開」をなすことはほぼ不可能であろうと考えられるからだ。現実界は、おそらく消極的・否定的にしか示され得ないものだ。例えばそれは構成主義的な認識が想定するような「現実」の構成がうまくいかない、あるいは端的に失敗するという形で現れてくるだろう。

だがネガティブに現れるものを観察するためには、それをネガティブたらしめている枠組みを明確にする必要がある。つまり何かを「失敗」と認定するためにはそれを「失敗」として浮かび上がらせるための枠組みが必要だということだ。例えば馬場靖雄はシステムの衝突をある種の失敗＝現実と捉えているが、これはシステム論の枠組みを用いることによって観察されるものだ（上の引用の中で著者が「ラディカルな構成主義」という言葉を用いているのはこのようなルーマンの議論を念頭においてのことであるのかもしれない）。物語論もまた「語り得ないもの」を浮かび上がらせるための枠組みであると言ってよい。問われるのは、精神分析（に示唆を受けた社会学）が「現実界」について理論的に「十分な展開」ができていのかどうかということではなく、そのような枠としてどのようなものを経験的に用意できるのだろうかということだ。

このような問は構成主義的認識論をめぐる今日的な状況を前提にするとよりいっそう重

要なものであるように思われる。今日的状況とは、すなわち、構成主義的認識論が単に理論のアリーナにおいてのみならず、日常的な生活実感のようなものとして広く受け入れられてしまっているということを指す(例えば虚構化の極限までの進展についての大澤[2005]の指摘やリアリティテレビの受け止め方をめぐる北田[2004]の分析などを参照されたい)。このような状況に対して、なぜそれが広く受け入れられるのかという点についての分析のみならず、その認識の失敗がどのような形で経験的に現れてくるのかについても経験的に記述する必要がある。

言うまでもなく精神分析にとってそのような記述のための経験的な枠とは臨床のそれであろう。ではそれに示唆を受けて展開される社会学にとってそれは何なのだろうということをごここでは問いたい。臨床経験をもたない社会学者にとって、自己物語への着目は大きな助けになるのではないかと思われるがどうだろうか。

3、精神分析と自己物語

うがった読み方かもしれないが、著者は例えばエディプスコンプレックスの概念がフロイトその人においてさえ「父親」なしに成り立つことを示すことで、精神分析を家族の特定の歴史的形態に拘束されたものと見なす一種の知識社会学的な視線をかわしてみせている(同様のことはファルスに関する議論についても言える)。精神分析の中で不変の定数と考えられている概念を偶発的なしたがって別様でもあり得るものとしてとらえかすこと。たしかにそれによって社会学的な思考と精神分析とはより柔軟に折り合えるだろう。

けれどもそれと同じくらい(あるいはときにはそれ以上に)重要なのは、それを用いて研究対象を観察する際の経験的な枠は何であるのかという点だ。自己言及にせよ現実界にせよそれ自体としてきわめて重要な概念であることは論を待たないが、これらを社会学的な観察に持ち込む際にどのような枠においてそれを用いるのかという点もおとらず重要である。そしてその自己物語論と精神分析の提携する余地があるのではないかと考える。

【引用文献】

- 浅野智彦、2001、『自己への物語論的接近』勁草書房
北田暁大、2004、『<意味>への抗い』、せりか書房
大澤真幸、2004、『帝國的ナショナリズム』、青土社
大澤真幸、2005、「不可能性の時代」、『世界』2005年1月号、岩波書店
竹中 均、2004、『精神分析と社会学』、明石書店